



キャンパス／熊本県熊本市 学生数／1,502人 創立／1959年(衛生検査技師養成所)  
建学の精神／優れた医療技術者の養成を通じて社会に貢献する  
学部／保健科学  
大学院／保健科学



# 学修者中心の可視化のしくみを 生き残りをかけた自学の「強み」に

## 熊本保健科学大学

カリキュラムの独自性を打ち出すことが難しい医療系単科大学が取った生存戦略が、可視化されたデータを基に学修者が自律的に成長できるしくみづくりだ。



学長 竹屋 元裕

たけやもとひろ ●1981年熊本大学大学院医学研究科病理系専攻(博士課程)修了。ラホイヤ癌研究所(サンディエゴ)研究員等を経て、2000年熊本大学教授。同大学医学部長、理事・副学長等を歴任。2019年熊本保健科学大学学長、銀杏学園理事に就任。

### 目標との差異を可視化し 学生の成長意欲を喚起

地方の小規模かつ国家試験合格が命題の医療系単科大学が、競争を勝ち抜き、10、20年後も選ばれるには——この問題意識が、本学の学修成果の可視化の根底にあります。専門職に必要な知識・技能修得の教育は要件が決まっております。他校との差別化は難しい。そこで、本学ならではのプラス要素として考えたのが、なりたいたい医療人像に向けて学生が主体的に歩む力を育むことでした。「安定した生活のため」「保護者に言われて」といった志望動機の学生は、入学後にモチベーションが低下します。到達目標を決め、どこまで伸びたかを自身で確認しながら意欲的に成長していけるしくみをめざしました。DPの見直しや、カリキュラムツリー、アセスメントプランの作

成等に取り組む中で、大学と学生双方が学修成果を確認できる共通言語として策定したのが、「熊保大生到達目標」です。大学側は、卒業までに身に付けるべき資質・能力を全教職員で出し合い、目標としてDP5項目に学士力の要素を加えた12項目を設定。学生には1年次前期の必修科目で、この目標達成に向けた「自分自身に対する宣言文」を書かせます。そのうえで、セメスターごとに、12項目の自己評価と客観評価をリーダーチャートで可視化。成長の推移や、目標との差異を確認しながら、学びを進めるしくみを築きました。

### 学修成果「学生の声」で 学生目標の教育改善へ

しくみの実効性を高めるため、私は教職員一人ひとりと顔を合わせ、「形だけにしない」「学生のために」のメッセージを伝えました。1人か2人の教員が各学年の学生5〜8人を受け持つ「スモールグループ担任制度」を活用し、リーダーチャートが出る担任が学生との面談を行い、学生は自分の課題に合わせて次期セメスターの学計画を立てます。導入直後にコロナ禍に見舞われ、本格運用は本年度からですが、教員からは「指導

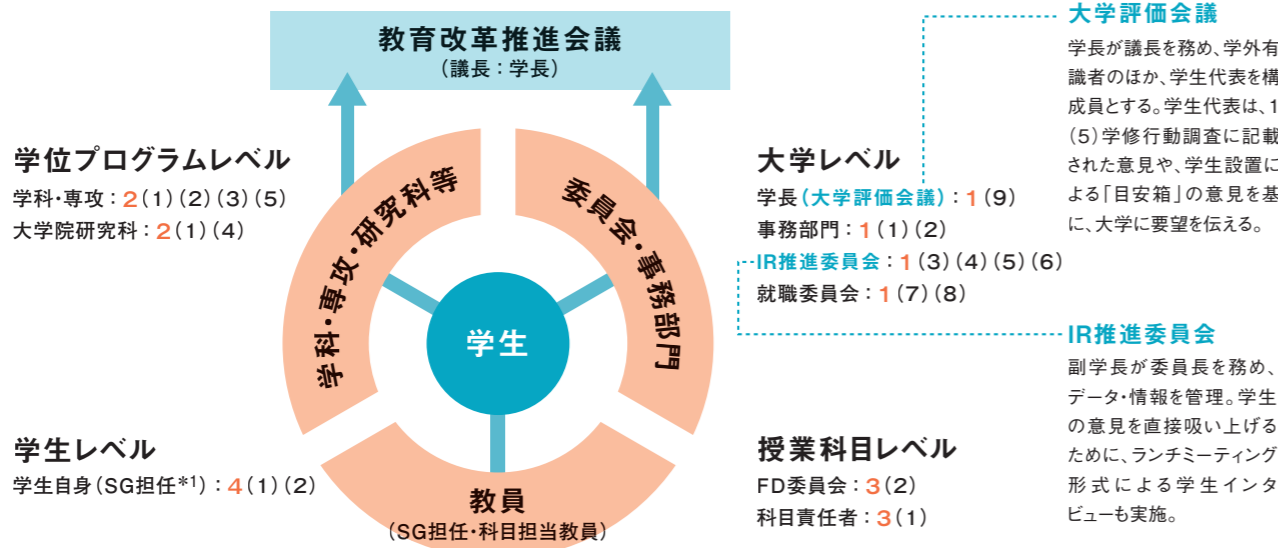
の手掛かりができた」と好評です。熊保大生到達目標を含む各種アセスメントの結果は、教学改善の資料としても活用します。データは時系列や学科・専攻間で比較し、教育課程上の問題点を探ります。ただし、中心はあくまで学生(左ページ図)。私が議長を務める大学評価会議や、IR推進委員会による面談に学生を招き、データへの意見、能力の伸びや、つまずきの詳細を聞き、学修者目標での教育改善につなげています。

アセスメントの結果は、学内のみならず、学外との共通言語にもなり始めています。熊保大生到達目標をディプロマサプリメントとして活用する案を、就職実績のある病院に提示したところ、選考資料としての活用意向がありました。学生募集にも活用し、最新の大学案内では、スキルの修得状況や学生満足度等のデータを掲載、学生が成長できる環境を強く打ち出しています。ある高校とは、卒業生が入学後にどのように成長したかを共有できるよう、情報提供のあり方について協議を重ねています。情報開示の効果か、本年度のオープンキャンパス来場者数は過去最高でした。今後も、学生が自身の成長を意識して学ぶ大学づくりを追求していきます。

- DP 1 命の尊さを理解するとともに、自他の人格を尊重すること、人を思いやることのできる 2 保健・医療・福祉の専門職に必要な知識と技術を備え、多様な人々と連携協働することができる 5項目中、2項目抜粋

### 学生を中心とする内部質保証体制

※レベルごとに、取り組み主体を記載



### アセスメント一覧

※レベルごとに、担当するアセスメント(番号)を記載

- |   |   |  |  |
|---|---|--|--|
| 1 (1) 国家試験合格率、就職率等<br>(2) 修学ポートフォリオ(熊保大生到達目標)<br>(3) GPS-Academic*2(入学時/3年次)<br>(4) 学習定着度調査<br>(5) 学修行動調査 | 6 卒業・修了時アンケート<br>(7) 卒後1年目アンケート<br>(8) 就職先アンケート<br>(9) 大学評価会議 | 2 (1) 国家試験合格率、就職率等<br>(2) 修学ポートフォリオ(熊保大生到達目標)<br>(3) 卒業研究等に対するルーブリック評価<br>(4) 修士学位論文の審査<br>(5) リメディアル教育の受講状況 | 3 (1) レポート等に対するルーブリック評価<br>(2) 授業改善アンケート<br>4 (1) 修学ポートフォリオの振り返り(個人別)<br>(2) GPS-Academic(個人別) |
|---|---|--|--|

## 注目

### 教育の担い手として、学生の力を活用 必修科目の授業設計、人材育成に参画

1・2年次の全学必修科目「アカデミックスキルI・II・III」の運営に欠かせないのが、2〜4年生の「学生指導員」(現在7人)の存在だ。授業支援だけでなく、授業設計、教材開発、人材育成にも携わっている。

同科目は、グループワークや発表を通して、医療人として必要な、「自分の言葉で書く」「話す力」を養うもの。主体的に取り組める授業にするためには、学生にとって「おもしろい」ことが必要だ。担当教員は、随時、学生指導員に相談を持ち掛け、学生視点で興味を引く内容に授業を改善していく。授業に使う動画の一部は、受講生がつまずきやすい点をふまえ、学生指導員が作成した。

授業内の話し合いは、受講生の中から募った「リーダー学生」が進行役を務める。このリーダー学生を募り、担当教員と共に育成するのも、学生指導員の役割だ。学生指導員の活躍に憧れた受講生がリーダー学生、さらには次代の学生指導員となり、新入生を支援する。学生を教育の担い手に組み込むこのサイクルが、大学と学生の距離を近づけている。



(写真上)リーダー学生に、グループワークの進め方等をレクチャーする学生指導員(写真左下)学生指導員が作成した、リーダー学生のリクルーティングを目的とした動画(写真右下)プレゼンテーション能力育成の成果発表の一端として行われた、小中学生対象のからだのしくみを説明する寸劇の様子

\*1 スモールグループ担任制度の、担任教員  
\*2 ベネッセi-キャリアが提供する、学修成果可視化のためのオンラインアセスメント [https://www.benesse-i-career.co.jp/gps\\_academic/](https://www.benesse-i-career.co.jp/gps_academic/)